

裸の足をささげよ

[聖書] ヨハネによる福音書 13章 1～15節

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか?」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのため、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。

[序] 3月を迎えて

3月を迎えました。教会の暦で言うと、この間の水曜日から「受難節」(レント)に入っています。一年の中でも、一番主イエス・キリストのお苦しみに私たちの心を合わせる季節です。今年の復活節・イースターは4月12日ですから、40日間ほどの間、じっくりとこの時を過ごしたいと思ひますし、この受難の歩みが私たちにとって何であるのか、心新たに聖書から聴いて行きたいと思ひます。

今40日間と申しましたけれども、ヨハネによる福音書は、たった一晚にあったことを、13章から17章まで5章を用いて描写しています。その一晚とは、最後の晩餐(あとで執り行う「主の晩餐式」の原型)を行ったあの夜の一日です。十字架に

お架かりになる前日・木曜日の夜です。その夜の出来事と主イエスの言葉について、ヨハネは、他の福音書には書かれていない内容を残してくれています。そして、それはとても驚くべき内容だと思います。

[1] 洗足と「愛」

このヨハネ 13 章の初めのところですが、ここには、主イエス様が**弟子たちの足を洗われる**という出来事が書かれていました。私たちは既にこの話を知ってしまっているので「あああの話か」と思ってしまうかもしれませんが、まささらな気持ちで想像してみたいと思うのです。この時の弟子たちの驚きを、です。

3 節からもう読んでみたいと思います。

「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。」

誰がこのようなことを想像出来たでしょうか。弟子たちのざわめき・動揺が見えるようです。ここにはイエス様がお選びになった 12 人の弟子たちがいたでしょう。あのユダもここに例外なくいたのです。彼が出て行き、主を銀貨 30 枚で売ってしまったのは、このあと食事をしますがその後です。彼も主に足を洗ってもらったのです。ここにあるのは、「愛」です。神の愛です。ヨハネはこう書いていますね。13 章 1 節。—「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」

「このうえなく愛しぬかれた」とありましたが、これは「最後まで愛し通された」とか「極みまで愛された」とも訳すことができる言葉です。イエス様の地上の生涯の最後の夜でもあるので、文字通り「最後」でもありますが、同時に「極み」まで愛されました。中途半端ではないということです。神様の愛とは、愛すると言われたら、終りまで、そして、とことんまで愛される愛なのです。

[2] 「愛」はことばではなく

「愛」というのは、言葉ではありませんよね。言葉というのは悲しいかな、偽るものです。例えば最近の国会答弁や会見などの言葉は、私にはとても空しく響きます。誠実さ、或いは本気度が見えてこないことが多いです。でも、言葉以上に、その人がどれだけ相手に向かっているのか、愛しているのかは、その人の生きざまや行動に出てきます。イエス・キリストという方は正にそのようなお方だったと思います。そして、この方には、言葉と行動の乖離がありません。

しかし、このイエス様の「弟子の足を洗う姿」というのは誰も予想が出来なかつ

たものだと思います。ペトロもこの中で「あなたがわたしを洗われるのですか」ととても驚いていますが、無理もないことだと思います。なぜなら、イエス様は神の子、救い主であると思ひ始めていたペトロにとって、まさか、“膝をかがめる救い主”などというのは、見たくなかったに違いありません。英雄的で、力に溢れた救い主であれば問題なく受け入れられるのです。けれども、この時の主のお姿は、正に奴隷がするわざに等しい行為でした。或いは子供のいる家では、子供が親のために足を洗うことが多かったようです。立場や身分の低い者がする行為、それが足を洗うことです。ペトロは、いや、私たちでもそこにいたら“やめて欲しい！”と思うのではないのでしょうか。…しかしイエス様は、いとも平然と、立場や身分などというものは全く自由になって、弟子たちの足を一人、また一人と洗われたのです。

[3] 「隠された場所」をさらけ出す

この出来事を私たちに引き寄せて黙想してみたいと思います。

—「足」。ここは、毎日使います。生きていればどうしても汚れる部分です。臭くなる部分です。それを人の前にさらけ出すということは、医者の前でする以外、まずしないと思います。それは、「隠された場所」なのです。他人の目にとってもそうですし、自分自身にとってもそうではないのでしょうか。皆さんは、自分の足を毎日丁寧に洗われるのでしょうか？まあお風呂に入れば洗うでしょうけれども、普段は、表面に見える「手」ほど気にしない部分ではないのでしょうか。

私たちの「罪」も同じだなあ、と思ったのです。人の目に触れる所は取りあえずきれいに見せることが出来ます。丁度お客さんが急にやって来ることになったら応接間を慌てて片付けるように、そこは即席できれいにします。けれどもその分、見せたくない部屋、隠しておきたい部屋というものがある訳です。そこは守りたい、見せたくない、と思うのが私たちの常識かも知れません。けれども、救い主は、表面上ではなく、私たち全体と、全人格と出会うために、私たちの所にやって来るのです！罪をさらけ出せない私たちなのです。きれいな表現ではありませんが、毎日歩き、汚れが重なり、臭くなってしまっている足を、つまり隠された罪を、救い主は、自らがたらいに水をくみ、手ぬぐいで、丁寧に洗って下さるというのです。多分、指と指の間も丁寧に洗われたことでしょう。私たちが放置している罪を、イエス様自らが拭い、清めて下さるのです。私たちの罪は、自分の手で消せるほど簡単なものではないのではないのでしょうか？

この時、ペトロはこのイエス様が自分たちの足を洗われる行為に驚き、「わたしの足など決して洗わないでください」言いましたが、そのあとイエス様は決定的なことを言われます。—「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」(8 節)。—私たちとイエス様との関わりというのは、この方に

洗って頂く、という関係に他ならないと言うのです。私はこの聖句も思い起こしました。「**人の子が来たのは、仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるためにきたのである**」(マルコ 10:45)。私たちはこのイエス様の前に、何の遠慮もしないで**自分の裸の足を差し出す**ことをしてよいのです。そう、私たちが神様に自分の罪を遠慮なくさらけ出すことが出来る、そのためにこそ、主はまず先手を取って、私たちの足をゴシゴシ洗って下さったのだと思います。

[結]「信仰」は一生涯のこと

弟子たちは皆、このイエス様の**洗足の出来事**に与りました。けれども、それですっかり出来上がった信仰者になった訳ではありません。他の福音書によれば、この後、最後の晩餐の食事があったその時でさえも「**弟子たちの間で誰が一番偉いか**」という議論をしていたというのですから、情けない話です。けれどもその一方、その事実は慰められます。「信仰」というのは、私たちの“一生涯の事柄”なのではないでしょうか。自分自身にがっかりすることもあるでしょう。いえ、きっとその連続だと思えます。また、他の人を見てがっかりしたり、裁きの目で見てしまうということからも自由になれない私たちだと思えます。特に牧師などは一番その恐れがあります。傲慢になり易いのです。…私たちの「足」、それは毎日汚れるのです。私たちの罪は、イエス様に何度でも何度でも洗って頂かなければならないものです。ですから、今日もイエス様の愛を身に受けるために、このあと「**主の晩餐式**」を守るのです。

晩餐式を制定された主は、神と等しい身分でありながら、全く低い人間となられて、私たちの汚れた裸の足を洗って下さるほどに私たちに身をかがめて下さるお方です。そして、私たちへの愛ゆえに、**ご自分の命を十字架で投げ出して下さった**お方です。このお方の、私たちを「**極みまで愛して下さった**」愛に身を委ね、あるがままの私自身を安心してさらけ出し、捧げたいと思えます。そこに**本当の「自由**」があります。イエス様によってお互いを変えられていく、信仰の共同体が生まれていくのだと思えます。

この主にある交わりが与えられていることは何と感謝なことでしょうか！

お祈りを致します。